TOWARD THE NEXT STAGE

みんなでつくる「新しい文化会館」の取組状況をお届けします

飯田文化会館 ニュースレター

2023.02
Vol. 3
TAKE FREE

令和4年11月25日。飯田人形劇場にて、新文化会館整備検討委員会が開催されました。同委員会はこれまでに3回開催され、飯田の文化や文化会館の役割を考える中で見えてきた30のキーワードをもとに「みんなが集い、創り、伝える 感動の 飯田ひろば」という仮の基本理念の設定まで進んできました。

第4回の検討委員会は、リニア時代の新しい文化会館のあり方をどう据えていったらよいか、今後の基本構想を議論していくための学習会として開催しました。

第1部

基調講演

テーマ ｜ 全国事例から見えてくる新しい時代の地域の公共劇場の姿

講　師 ｜ 公益社団法人 全国公立文化施設協会 アドバイザー
劇場計画コンサルタント／空間創造研究所 取締役／岡山芸術創造劇場長
草加叔也（くさかとしや） 氏

新しい公共劇場は「ひと」「まち」「賑わい」をつくる

講師の草加叔也氏からは、全国の公設劇場・音楽堂等の施設数の多さや時代とともに変化してきた役割、また、岡山市に新しくオープンし自身が劇場長を務める岡山芸術創造劇場の整備プロセスやコンセプト、機能等に触れながら、新文化会館のあり方を考える上で拠り所となる考え方についてお話いただきました。その中で、草加氏は「劇場は常に進化をしている。変化をするものです。ずっと同じサービスを提供しているのではなく、成長する施設なんです」と話します。

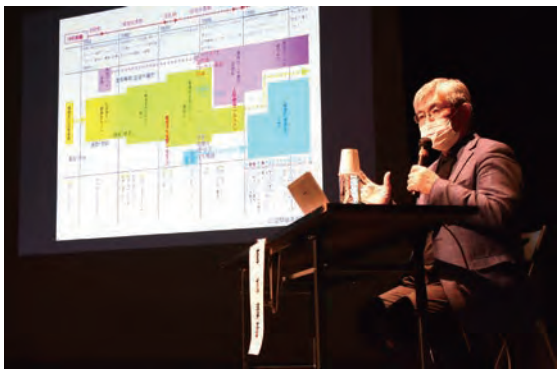
公共劇場の果たす役割が、①地域の市民に平等・均等に利用の機会を提供する機能から、②優れた音楽芸術や舞台芸術を招へいし、芸術文化に触れる機会を増やす機能へ。そして、これまで音楽や舞台といった芸術文化に触れてこなかった市民に振り向いてもらうための実践活動を通じて、そこから③「ひと」「まち」「賑わい」をつくる機能へと変化してきていることを具体的事例を交えて説明されました。

さらにこの視点に立った時、施設機能を考える上で、「地域性と広域性、専門性と多機能性、この2つの軸の中で重心をどこに置くとよいか考えることが重要。仮に設定した新文化会館の基本理念の中に含まれる言葉、特に地域を意識した“飯田”や“ひろば”といった言葉が何を伝えてようとしているのか、そのためにどんなことをしなければならないのか、そのための機能は何かをしっかり考える必要がある」という問題提起がされました。

仮に設定された

新しい文化会館の基本理念（11/25 時点案）

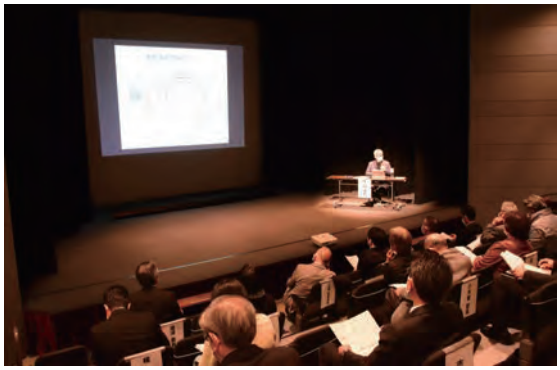
みんなが集い、創り、伝える　感動の　飯田ひろば



公共劇場の果たす役割の変化

1. 地域の市民に平等・均等に利用の機会を提供する機能（～30年前まで）
2. 優れた音楽芸術や舞台芸術を招聘し芸術文化に触れる機会を増やす機能（～10年前まで）
3. 「ひと」「まち」「賑わい」をつくる機能（～現在）

創造発信型の劇場



第2部

パネルディスカッション［特別対談］

テーマ　リニア時代の飯田にふさわしい「新飯田文化会館のあり方」

進　行　佐々木宏幸（ささきひろゆき）　学識委員　明治大学教授／博士／一級建築士／米国公認都市計画家

対談者
草加叔也（くさかとしや）　講師
小澤櫻作（おざわおうさく）　学識委員　上田市交流文化芸術センター（サントミューゼ）プロデューサー
山元　浩（やまもとひろし）　学識委員　名古屋フィルハーモニー交響楽団 演奏事業部長
塩澤哲夫（しおざわてつお）　整備検討委員長

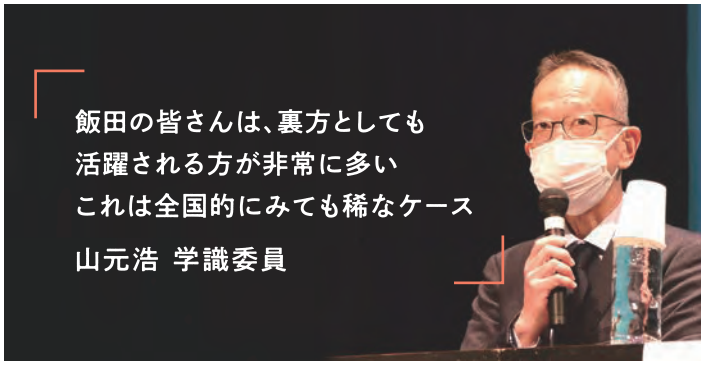
リニア時代の新文化会館に向けて －地域性と広域性、専門性と多機能性－

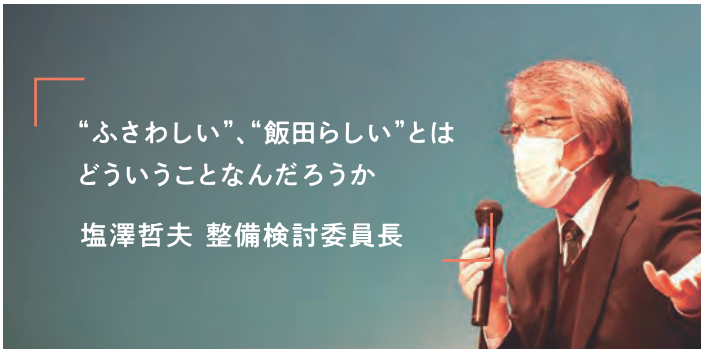
特別対談は、草加氏からの基調講演での問題提起を受け、2つの論点で対談が進みました。1つは新文化会館の役割として「ひと」「まち」「賑わい」をつくるという役割までも想定した時に、東京や名古屋との時間的距離が短縮されるリニア新時代に地域性と広域性というものをどのように捉えていったらよいのか。もう1つは、創造と鑑賞のバランスにも関わってくる施設機能としての専門性と多機能性をどう考えたら良いのか。それぞれの立場のパネリストから意見が出されました。

飯田ならではの文化の創造と発信 －オンリーワンを目指す－

まず、地域性を考える視点として山元浩氏からは「飯田の皆さんはそれを楽しむだけはなくて、時には出演者となって舞台に立つとか、皆さんが劇場の事業の裏方としても活躍される、そういう方々が非常に多い。これは全国的に見てもまれなケースであって、他地域ではなかなかない」と話し、劇場の活性化に向けて市民が動き出すという飯田ならではの土壌を活かしながら、これまで文化会館に関わることのなかった方たちも巻き込んだ文化会館のあり方を模索していくとよいのではないか、との発言がありました。

また、整備検討委員長の塩澤哲夫氏からは「“飯田にふさわしい”という言葉を使われていますが、“ふさわしい”ってどういうことなんだろうか、“飯田らしい”ってどういうことなんだろうか。（中略）その辺を私たちが『やっぱりなるほどね』というふうに納得しないといけないんだろうな、と思います」と、飯田ならではの文化を創造し発信することの重要性を話しました。



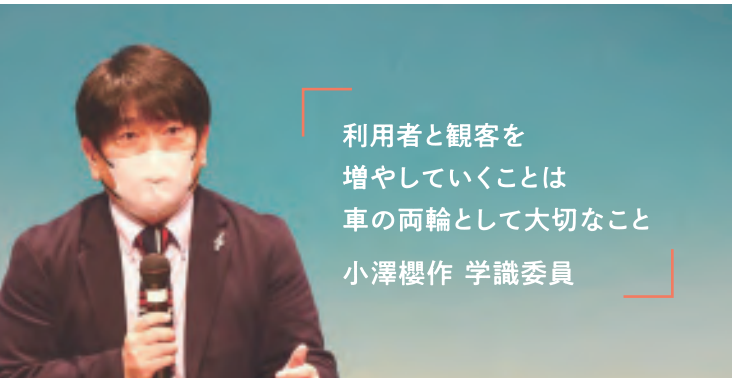


時間的距離の短縮を戦略的に活用していく

一方で広域性という視点からは、「リニア中央新幹線が開通することで、劇場へ都市部からたくさんのお客さんを招くというのは現実的に難しいのではないか」ということが共通意見として出されました。その上で、リニア中央新幹線の効果による時間的短縮の生かし方について、草加氏は「首都圏、あるいは中京圏をうまく使っていくための手段として、この時間軸を使っていく。これが一つの戦略になるんじゃないか」と話し、単に観にきてもらうことを待つのではなく、短くなった時間をどう生かすかという視点に立ちながら、地域の舞台芸術の振興に有効・有益な人材の活用（招致）や創造活動のあり方を考えるという、リニア時代への新たな視座を提示されました。

第2部

パネルディスカッション
[特別対談]



新しい文化会館の多機能性・専門性

施設機能の専門性と多機能性については、施設規模との相関関係が話題に。草加氏は「必ずしも大きな観客席数を持たないと質の高い鑑賞事業ができないわけではない」として、例えば複数のホールの中に専門性を持つ小ホールを持つなど、ある程度重心を持った多機能ホールをつくるという考え方も選択肢の１つではないかと話しました。

「創客」の視点からのアプローチ

草加氏は、劇場という場所が本質的には市民が創造する場所であることを前提としつつ、時間的短縮というメリットを戦略的に活用しながら、その地域の人々にとって芸術鑑賞がライフスタイルの一部となるような、「創客」の視点からのアプローチの重要性を訴えました。小澤櫻作氏も「持続可能な施設の運営といったところでも、利用者を増やしていくのと同時に観客を増やしていく創客ということが、車の両輪として本当に大切だと思っております」と話し、市民が創造する環境をいかに支えるかという視点とともに、普段舞台芸術に触れる機会の少ない人たちへのアウトリーチ活動やワークショップなど、創造と鑑賞をともに育てていくことの大切さを強調しました。

特別対談 の Point
佐々木宏幸　学識委員

Point 01 リニア時代には、「まち、賑わい、人 をつくる」といった役割を劇場にどう持たせるかが重要

Point 02 リニアによる時間短縮を、単に人を呼ぶ手段だけでなく、新しい文化会館の創造活動などに生かしていく視点が必要

Point 03 地域の文化施設として飯田周辺エリアを主対象とし「主目的ホール＋専門的小ホール」とする考え方もある。
収容しきれない機能は時間距離短縮を活用して別途供給する視点も必要

「“ひろば”という言葉は、最もクリエイティブな空間のことである」と話す草加氏。新文化会館が、新時代を切り拓く飯田ならではのオンリーワンの舞台芸術のひろばとなるよう、整備検討委員会は、これからいよいよ基本構想の検討に入ります。

発行：令和5年2月　制作：飯田文化会館　〒395-0051 長野県飯田市高羽町5-5-1　TEL 0265-23-3552　FAX 0265-23-3533
新文化会館の整備検討に関する資料は、飯田市のWEBサイトで公開しています。 https://www.city.iida.lg.jp/　新文化会館 検索